紫苑の花　　―君を忘れない―

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紫苑の花　－君を忘れない－

【Ｎコード】
Ｎ５０８２Ｅ

【作者名】
松の慎

【あらすじ】
何回も好きだと言ったけれど叶わないユキの恋。「ユキは親友でしかない」と言われ続けても諦められなかった青春時代。それでも愛しくて、最後に初めて君に触れたときに誓った。一生親友でいようと。君を忘れないために作った紫苑の花の浴衣に思いをのせて…

好きだ

何回言えば叶うのか。

何度振られれば諦めるのか。

諦めきれない俺が、ここにいる…

「なに？誰、その子？」

携帯で撮った写真をボーッと眺めていると、大学入ってから猛烈に仲良くなった親友の直樹が言った。

「…はっ？！つかなんでお前いんの？！」

ここは俺の家。

特に家に呼んだわけでもないのになぜか直樹がいる。
俺がそう言うと、直樹は「鍵が開いてたから勝手に入っちゃった」と語尾にハートマークを付けて言った。
直樹は真っ茶色の髪をしていて、背なんか俺よりずっと低め。
笑った顔が可愛いと女子にも人気がある奴。

「で？誰ー？彼女？可愛いじゃん」

直樹は催促するように尋ねてくる。

「いや、まぁ…親友かな」

男の親友は直樹が始めて。
小学生のときは親友とかはいなかったし、中学高校ではあいつが俺のたった1人の親友だった…

「女の親友？へー、すげぇな」
「なにが？」
「男女間での友情は成り立たないってよく言うじゃん？」
「ああ…まぁよく言うわな」
「どっちかがどっちかを好きになった時点で「友情」じゃなくなる

もんな」

そうさ、少なくとも俺にとっては「愛情」だった。

けどあいつにとっては俺は俺でしかなくて、友達以上になれることはなかった。

休み時間ずっと一緒に話していても
移動教室一緒に行っても
休日遊びに出かけても
一緒にテスト勉強しても

俺があいつの特別になることはなかった。

「でもさ、親友の写真なんか見ちゃって本当は好きだったんじゃないの～？」

直樹は冗談交じりに言う。

さっきのは俺とあいつの2ショット写真。

学園祭のときに撮ったものだ。

焼きそばを食いながらピースしている俺と、クラスの出し物で甘味

喫茶をやってたから浴衣を着ている笑顔のあいつが写っている。
女子の浴衣は男子が作ったりしてかなり盛大にウケてたな。
男女の人数が同じだったから1人の女子の浴衣を1人の男子が作ったんだ。
デザインも裁縫もすべてな。

「ああ、好きだったよ」

俺がそう言うと直樹は「えっ！」と予想外の答えに驚いている様子。
そして俺はさっきの携帯の写真を直樹に見せた。

「見てよコレ」

俺は浴衣を指差した。

「浴衣？あ、かわいー浴衣。白地にピンクの花柄」
「こいつによく似合ってるだろ？」
「だな。で、これが？」

そう、イメージとしては子供っぽさに可愛さを引き出したつもり。

小柄で、成績なんか学年トップのくせに天然入ってるせいかアホで。
いつもニコニコ笑っててみんなから可愛がられて。
そんなあいつにピッタリだと思った。

「これ俺が作ったんだ。で、渡すときに告った。えーと、確か2度目の告白だったな」
「えぇーーーー?!」

誰がどの女子に浴衣を作るかはクジ引きだった。
偶然にも俺はあいつに作ることができた。

これがきっかけで付き合い始めたカップルも何人かいた。

中学の頃、席が前後だったことから友達になった。
誰よりも仲良くなって、これはいけるんじゃないかと内心期待していた。

けど、あいつは2年の頃彼氏を作った。
向こうからの告白。

それをあいつが受け入れたものだから、周囲には俺とあいつの仲はただの友達と認識されるようになり、あいつは他にも3人から告白

された。

つまりそれまでは俺とあいつがカップルだと思われていたらしく、誰もあいつに手を出さなかっただけなんだ。

その後あいつはそれっきり付き合うことはなかったけど、好きになる奴はいた。

俺は何度もその相談に乗った。

その男は、俺の友達だった。

2人は両思いだと知っていた。

けど、俺が仲介して2人が付き合うなんて嫌だったから2人にはその事実を教えないでいた。

そのまま時は流れ中学卒業。

俺は卒業式にあいつに告白した。

結果は、まだそいつのことが好きだからと断られた。

それが1度目の告白。

それよりなにより相当ショックを受けていたらしい。

親友と思っていた俺からの突然の告白。
俺の思いにちっとも気づいてあげられない上に、恋愛相談までして無神経なことをしたと悲しそうに言っていたとあいつの友達が俺に教えてくれた。

春休みは1回も会わず連絡もしなかった。
あいつと俺は同じ高校に進むことは分かっていたけど、いざ高校に入ってみると1年のときも同じクラスだった。

2年も3年も。

「高校入ったばっかんときはやっぱちょっとぎこちなかったけど…でもそのうち普通に接するようになって、また中学の頃みたくいつも一緒にいるようになった」

高校でもやっぱりあいつはモテた。

けど、やっぱり俺と付き合ってるんだと勘違いされて最初は誰もあいつに手を出さないんだ。

誰かがあいつに「ユキと付き合ってるの?」と尋ねた。
あいつは間を空けることなく「ユキは親友」と答えた。

それから、あいつはまた告白されるようになる。
高校のときは2人からだったかな。

「なんで…それでも好きなの？」

直樹は怪訝そうな顔をしながら言う。

「１回振られて、それでキッパリと親友だった言われたんだぜ？…今も好きなのか？その子のことを」

人はきっとそう言うだろう。

なんでそれでも好きなのか、と。

けど、人を好きな気持ちは簡単には変えられない。

ダメだと分かっていても、無理だと知っていてもそれでも心はいつもそいつのところにあって、そいつの笑顔に癒されて、そいつの言葉１つに一喜一憂するんだ。

２度目の告白も断られた。

１度目のときにも言われたけど、「ユキは一生親友でしかないの、あたしにとって」と言われたんだ。

直樹にそう言うと、「お前、バカだよ…」と切なそうな顔をする。

そう、バカだ。
俺はどうしようもないバカだ。

一生親友って言われてんのに、たった2年間の間に2回も告った。
あいつの気持ちが変わることなんかないと知っておきながら。
あいつが俺に告られるたび辛く思うんだと自覚しながら。

「それでも抑えられないんだよ。本気で好きだったから」

それでもあいつは俺の浴衣を着てくれた。
嬉しそうにありがとうと言ってくれた。

学園祭、一緒に回った。
それは親友として。
そして、あいつの優しさ。

けど俺の友達の1人があいつに言った。

『なぁ、なんで一緒に回ってんの?』
『おう、三宅。なんでって、約束してたし?』
『じゃなくて、俺は葉菜(はな)ちゃんに聞いてんの』

三宅は俺のことを心配してくれるから言ってるんだと分かった。
みんな俺が葉菜のことを好きなのも、振られたのも知ってる。

『なんで気ぃもたせるようなことすんの?だってユキ振ったんだろ。
ユキが可哀想だ』

はたから見ればそう思われるかもしれない。
振ったのに一緒にいるのはおかしいって、そう思われるのは不思議じゃないかもしれない。

『ちょ…三宅!良いんだって、俺がそうしたいんだから』
『よかねぇよ。だってお前こんなんあんまりじゃねぇかよっ』

カッカする三宅に葉菜は、いつになく真剣な顔をして言った。

『ユキはあたしの親友だから一緒にいるの』

その答えが気に入らないのか三宅は、それでもなお葉菜に文句を言う。

それでも葉菜は冷静になって言うんだ。

『ユキとは前から一緒に回るって約束してた。それはユキがあたしの親友だから。振るときにもあたし「ユキとは一生親友」って言った。なのに一緒にいなかったら親友ですらなくなってしまう』

そう、それは葉菜の優しさなんだ。

自分で俺のことを親友って言ったんだから、親友としての約束は果たさなきゃって思っていた。

「親友だから一緒に回る」約束してたのに一緒に回らなかったら「親友」という位置付けすら消えてしまうんだ、と。

『三宅くん、あたし確かにユキにひどいことしてる。でも…ユキはあたしのたった1人の親友で大切な存在なの。あたしのことをどんなに悪く言っても構わないけど、ユキを可哀想なんて思わないで』

ポワーっとしててドジな葉菜から出た言葉とは思えなかった。

三宅は納得したのか分からないけど、それ以上俺たちのことに文句を言うことはなくなった。

三宅を悪者だとは思わない。
心配してくれたんだって分かってる。

けどそれよりなにより、葉菜の気遣いが嬉しかった。
それでも俺を親友として繋ぎとめてくれているという事実が、なによりも嬉しかったんだ。

「親友かぁ…」

話を聞いていた直樹は複雑そうな顔をした。

「嬉しいんだか悲しいんだか分かんねぇよな」

ハハと笑って言う俺に、直樹は悲しいに決まってるだろ、と言った。

「でもバカな俺は、2年のとき振られてもそれでもずっと好きだったんだよ」

むしろ、嫌いになれる理由なんてなかった。

一緒にいればいるほど好きになっていく。

どこまでが友情で、どこからが愛情なのか…

良いところもたくさん知ってる。

逆に悪いところもたくさん知ってる。

なのに、嫌いなところなんてないんだ。

葉菜のすべてを本気で愛していた。

「なんで…」

直樹は枕を抱きかかえながら少しだけ震える声で言う。

「なんでそこまでして好きでいられる?」

好きでいられたわけじゃない。

なにもずっと好きでいたいと思ってたわけでもない。

「…諦める方法が分からなかった」

せめて他に好きな子ができたら良かった。

なのに全然できなくて、隣には葉菜がいて。

「いや、分からなかったじゃない。分からないんだ…」

卒業する前に俺は再び葉菜に告白した。

3度目。

高校を卒業したら俺と葉菜は別々の道へ行く。

お互い大学へ進学するけど、違う県。

しかも頭の良い葉菜は国立で、俺は私立。

歴然と俺らの間に差はあった。

『ユキ…』

もう、高校を卒業したら今までのようにはいかなくなる。

そうそう会えるわけじゃないし、葉菜だってきっと向こうで好きな奴作って彼氏作って、俺のことなんか忘れるだろう。

思い出になんかしたくなかった。

俺と過ごした日々を思い出にして、新しい生活を向かえるなんて絶対に嫌だった。

『俺、今までに2回も葉菜に振られてるけど、それでも葉菜が好きだ』

最後の告白。

もう、今しかないって思った。

誰もいない資料室。

シンと静まり返る

『…ねぇ、ユキ。あたしたちいっぱい思い出あるよね』

『あ？ああ、そうだな。なんせ6年間だからな』

『そう、6年間』

中学から知り合った葉菜。

運動部に所属していて、中学のときは部長、高校では副部長にエース。
それでいて成績トップだし可愛いし、完璧人間だと最初は思っていた。

けど、葉菜の性格を知って、天然なとこもアホなとこも料理苦手なとこも知った。

すべてを知った上で好きになったんだ。

『長かったようで短いよね』
『だな。まぁ今としては全然短く感じるわ』

葉菜はきっと知らない。

俺はどれだけ葉菜を好きだったか。

けど、俺も知らない。
葉菜が俺のことをどう思ってどれだけ大切な存在として扱ってくれていたか。

親友なのに知らないことなんていっぱいあるんだ。

上辺のことばかり知っていても、中を知らなきゃ意味がないのに。

『あたしね、6年間ユキと一緒に過ごして無駄なことなんて何1つなかったんだよ』
『そんなん俺だって』
『ユキのことほんと大好きで、いっつも楽しかった』

葉菜は軽くうつむいた。

声を小さくして、今にも泣きそうな声で言うんだ。

『ユキがいたからあたし、青春時代送れた…』

なにするにも一緒だった。

一緒にいないときなんて、無に等しかった。

それでも分かっていた。
葉菜が俺を好きになることはないのだと。

分かっていても、俺は葉菜をこれほどまでにも好きになってしまったんだ。

『隣にはいつもユキがいて、あたしが悲しいときは必ず励ましてくれて…楽しいことをするのも全部ユキとだった』

葉菜の言葉によって思い出す6年間の葉菜との思い出。

いろんな行事があって
いろんなことがあって

泣いて笑って怒って
たくさん　たくさん笑った。

夏には花火をして
初詣にも行って

数え切れないほどの思い出が、頭に入りきらないほどの思い出が散りばめられる。

『…幸せだった。ユキといれて。楽しくて楽しくて、きっとあれ以上の楽しい日々なんてこれから見つからない』
『…うん。俺もそう思う』

そして葉菜は鼻をすすって、俺の顔を見上げた。

頬に流れる涙が光って見えて

『幸浩』

そして葉菜がはじめて俺の名前をそう呼んだ。

『今までいっぱいいっぱいありがとう。卒業して離れちゃうけど…
それでもあたしユキのことは忘れない。ユキは一生の友達だからね』

あいつは、泣きながらもニコッと笑うんだ。

精一杯の葉菜の誠実。

俺はギュッと葉菜を抱きしめた。

『ユッ…』

『ごめん、葉菜。今だけ』

俺が葉菜に触れたのも初めてだった。

『今までありがと。葉菜といれて幸せだった』

手すら握ったことはなかった。

葉菜が俺に後ろから抱きつくことはあっても、俺から葉菜に触れることだけは絶対にしなかった。

きっと、これが最初で最後。

『俺ら一生親友だよな』

『うん…』

『絶対に葉菜のこと、忘れない』

そして俺は葉菜から離れた。

葉菜の涙を袖で拭き取ると、葉菜はいつものような満天の笑みを見せる。

その笑顔にどれほど救われたか。

その優しさにどれほど癒されたか。

そうして、卒業式を迎え俺らはさよならをした。

「今も好きなのか?」

直樹、こんなこと言ったらたぶんお前はまた俺にバカだって言うんだろうな。

けど、それでもこれが俺なんだ。

「…最初お前を見かけたとき、葉菜とダブって見えたんだ」

授業中は必ずしも寝てるくせに当てられれば絶対答えられる。
みんなが好く可愛い笑顔。
そして小柄な体格。

男と女じゃ比較できないけど、そんなところが葉菜にどうしようもなく似ていた。

男版葉菜だって、思った。

「バカだよ。ほんっと」

ふと直樹を見ると、直樹は困ったような、でも愛しい笑顔をしている。

「どこまで好きなのさ、その子のこと」

「さぁ…」

けど、直樹を一目見たとき神様が俺にくれた宝物だと思った。

俺の親友だった葉菜は女だったけど、今度の親友は男。

葉菜にそっくりな男なんだ。

今度こそ親友に対して恋愛感情持つことなく友情で接すれる。

親友を好きになるほど悲しいことはない。

もし俺と葉菜が親友じゃなかったらどんな未来が待ってたんだろうと考えるときもあったけど、でもあの楽しい日々は葉菜と親友だったから築けたもの。

今なら仕方ないよなって笑って言える。

「まぁ別に諦められないものを無理に諦める必要はないわな」

「え」

「いーんじゃん? 別にユキはユキのスピードで」

夏休みになれば実家に帰る。

そしたらきっと葉菜と顔を合わせるんだろう。

そのときまだ葉菜のことを好きなのかどうかは分からない。
けど、俺の今の親友は葉菜みたいなんだって自慢して言いたい。

「忘れられないんなら、忘れなきゃ良い」

直樹は俺に向かって枕を投げる。
鈍い俺はそれをモロ顔面にくらう。

「直樹～！」

直樹に投げ返そうとすると、直樹はジッと俺の顔を見ている。

「…思い出して辛く思う日がくるなら、俺が聞いてやるよ」
「直樹」
「親友ってそういうもんだろ？」

いつもの可愛いはずの直樹の顔が、いつになくカッコ良く見えた。

今みたいに携帯を見て葉菜を思うたび、きっと俺は強くなる。

「…照れんだろっ」

俺はそう言いながら枕を投げると、直樹は「バーカッ」と笑った。

でも、直樹がいたらもう大丈夫な気がした。

葉菜を親友としてではなく女として見てた分、親友がどういうものかイマイチ分からなかったけど、直樹はそんな俺を受け入れてくれた。

「今度良い女紹介してやるよ。ユキのこと気に入ってる奴いるんだ」
「えー、良いよ別に」
「まぁまぁ友達からってことで」

でも、それも良いきっかけかもしれない。

葉菜のことはもちろん忘れないけど、新しい恋もしてみたい。

「そうだな。まぁ良いかもな」

俺がそう言うと直樹は一瞬驚いた顔をして、次の瞬間にはキッと睨みながら「でも葉菜ちゃんは忘れちゃダメだから！」と言った。

直樹の言葉が矛盾していて笑えてしまった。

「大丈夫。俺あの浴衣にデザインした花、紫苑だから」
「紫苑？なんで紫苑？つか紫苑って紫じゃね？」
「俺んちの方はピンクの紫苑が咲いてんだ」

紫苑の花言葉

君を忘れない

ｆｉｎ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5082e/

紫苑の花　　－君を忘れない－

2010年10月10日20時53分発行